
魔術師の弟子

レンくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師の弟子

【Nコード】

N4858Y

【作者名】

レンくん

【あらすじ】

レオン・ランバート12才 年に似合わない力を身に付けている少年の魔術学園での成長を描いた作品 処女作品で文章構成も研究中です

唐突な旅立ち（前書き）

この作品を読もうと思ってくれた人たちありがとうございます

この作品は作者がなんとなく書いてみたいという気持ちから始まってありますので

文章構成 設定の崩壊があるかもしれませんが

長く温かい目で見てもらえれば幸いです

唐突な旅立ち

僕の名前は レオン・ランバート

僕は産んでくれた両親の記憶がない

赤ん坊の時に盗賊に襲われ死んでしまったらしい

「おーい 飯だぞ」

いまの野太い声の持ち主が育ての親のカイゼル・ランバート おじさんって呼んでる

おじさんは筋骨隆々の体格だけど 本職は魔術師で結構名が知れているらしいよ

「いらんのかー？」

「すぐ行くよー!!」

階段を急いで降りると

おじさんは並べられた食事の前で座って待っていた。

「おそいぞ」

「ごめんなさい。ちょっと考え事してて」

すばやく手を洗い席に着いた

「いただきます」

いつも通り静かな朝食を取っているとカイゼルが唐突に話し出した

「レオン 来週からお前学園に行け」

「ほえ？」

黙々とご飯をお腹に収めることに集中している中と突然爆弾が投下された。

「……………なんも聞いてないんだけど」

「当然だ 今、初めて言っただけだから」

「あと、むこうの寮に入るのは3日後だ 遅れるなよ」

「3日後って ほとんど時間ないじゃん……………はあ も
っと早く言っつてよね」

朝の重大発表を聞いたので急いで荷造りの真っ最中です。

えっ？あっさり受け入れたんだね？

だって おじさんのすることだからね。

僕が4才で何の力もないのにモンスターのうじゃうじゃいる森の中に一軒家建てて住みだしたり

獅子は崖から這い上がって来たものだけを育てるんだとか言っつて、本当に崖から落としたり

30匹ぐらいいるウルフの群れの中に放り込んだり……………

……………まあいろんなことがあったね

そんな予測不能なおじさんの行動に物心付く頃から巻き込まれてい
れば

立ち直り（あきらめ？）も早くなるよね？

翌日には入学する王立魔術学園がある王都アデルに向け出発した

僕の住んでいるところはアデルの東に広がる森の奥にある

その森は漆黒の森と呼ばれていて

一人前と言われる冒険者でも苦戦するモンスターがうじゃうじゃいる

その森の中をレオンはすごいスピードで駆けていく

「ギャオオオオオー」

レオンに向かつて猪のようなモンスターが猛然と突っ込んでくる
レオンはすばやくモンスターに右手をかかげ

「エアーハンマー」

右手から風の玉が撃ちだしモンスターを吹っ飛ばした

何度かモンスターに襲われたりしたがやり過ごし昼には森を抜けた

レオンは森から抜けた後 おにぎりをほおばりながら王都に向けて歩いていた

「もぐもぐ……ん？なんだあれ？」

街道の先で馬車がモンスターに襲われていた

襲っているのは大きな体を持つ狼ベアーウルフの集団のようだ

護衛は馬車の中の人を守るためか馬車の周りからあまり離れることができず

戦況はあまり良くなさそうだった

「うーん 助けてあげたいけど あんまり力を見せすぎるなって言われてるしなあ」

レオンは元々魔法の才があったのに加えて

カイゼルのごきき？で中堅の冒険者と引けをとらない実力となっていた

レオンはまだ12才 若すぎる身で大きな力を持っていると知れば
利用しようと近寄ってくる者がでてくるかもしれないからの配慮
だったが

「姿を見られなきゃいいよね うん そうしよう」

茂みに隠れながら魔法の有効範囲まで移動し両手を突き出し詠唱を
始めた

「我願うは雷の力 悪しきに降り注ぐ裁きの雨となれ サンダーボ
ルトックス！」

馬車の上に大きな魔方陣が浮かび上がり 光った瞬間轟音とともに
ベアーウルフ達は黒こげになり地面に倒れた

「な、なんだ!？」

「光ったと思ったら倒れたぞ！」

護衛たちは突然の展開に混乱しつつも 馬車を守るために警戒を続
けた

「よし ばれてなさそうだね」

レオンはその様子を確認して茂みに隠れながら王都に向かって走った

「ねえ エリー さっきの光って」

「中級広範囲魔術ですね 術者は子供に見えましたが・・・何者で
しょうね？」

馬車の中2人はレオンが走っていったほうを見ながらつぶやくのだ

つ
た

唐突な旅立ち（後書き）

書いてみて思ったけど 自分の妄想を字にするのはむずかしい!!
少しずつうまくなっていくことを祈りつつがんばります

突然の訪問者（前書き）

1 話目より長く書けました

誤字脱字はデフォなので心を広くして読んでいただけると幸いです

突然の訪問者

馬車の援護をした後レオンはそのまま走りぬけ 夕方にはアデルに到着した

そのまま宿を探して部屋に着くと走り通しだったアデルはすぐに眠ってしまった

「うーん よく寝たあ」

目をこすりながら伸びをするとぴょんとベットから降りると身だしなみを調べ

宿の食堂に向かった

「おはようございます よく眠れましたか？」

「あ、おはようございます ぐっすり寝れました」

彼女はこの「旅人の止まり木」の女主人ネイルさんだ

ネイルさんは耳のところがたエルフ族で背が高くきれいな人だ

「朝食って食べれますか？」

「はい いま準備しますね 好きな席に座って待っててくださいね」

ネイルさんはパタパタと厨房のほうへ走っていった

レオンは窓際の通りの見える席に座り朝で活気のある通りを見て待った

「おまたせしました パンじゃなくてご飯で良かったわよね？」

「はい ありがとうございます」

「ごゆっくり」

窓から人間観察をしながら　おいしいご飯に舌鼓をうっていたが

「お食事中失礼します　こちらの席よろしいでしょうか？」

メイド服を着た女性がレオンの正面の席を指差しながら聞いてきた
レオンは戸惑いながらも頷き　女性は静かに席に着いた

「レオン様　どうもありがとうございました　私はエリー・テレサ
ハイデンベルグ家のメイド長をさせて頂いております」

「え、えっと　テレサさん？　お会いしましたっけ？」

綺麗なお辞儀をするエリーにしどろもどろになりながらレオンが聞く

「エリーとおよびください　先日　馬車が襲われた際に助けてくだ
さったのは　レオン様ですよね？」

断定に近い確認だった

「ひ、人違いでは？」

「いえ　王立魔術学園に入学予定のレオン・ランバート様　育ての
親は沈黙の魔術師と名高いカイゼル・ランバート様で幼い頃より指
導を受け　一部上級魔術も使うことができる實力をお持ちなのです
から　ベアーウルフを一撃で倒すのも納得でしょう」

「………な、なんで」

淡々と語るエリーにレオンの顔は引きつった表情になる

「失礼ながら調べさせてもらいました」

「調べたってまだ1日もたっていないのに……」

「メイドの嗜みです」

きっぱり言い切るエリーにレオンは「の句が告げずにいると

「さて 認めましたよね」

「あつ」

「大丈夫です 他言はしませんよ あんまり知られたくないのでし
よっつ」

「そうですね でしたら今日はなんで？」

「お嬢様がお礼をしたいとおっしゃっているのですが いきなりお
嬢様と合わせるには情報が足りなかったのですよ」

「……………」

あまりの理由に再び言葉を失っているとレオンの入学する学園の制
服を着た女の子がエリーの横に立っていた

「私は ハイデンベルグ家長女 ケイト・ハイデンベルグと申しま
す レオンさん 危ないところを助けて頂いてありがとうございます
す」

ペコリと頭を下げ 少女はにこりと笑った

「い、いえ 無事でよかったです」

「お食事 ご一緒してもよろしいですか？」

「はい どのどうぞ」

いつの間にか エリーはケイトの後ろに立っており ケイトの座り
やすいように椅子を引きケイトが席に着くとすぐさまケイトがエリ
ーの食事を机に並べた

(いつの間に準備したんだよ)

「えっと ハイデンベ「ケイトとお呼びください」・・・ケイト様」

「ケイトと呼び捨てでかまいませんよ」

からかうような表情でケイトが言ってくる

「・・・ケイトさんは観光でこちらへ？ ハイデンベルグ家といえはアデルからは離れていたと思ったのですが」

「もう ケイトでいいと言っているのに・・・王立魔術学園に入学するためにきたのよ 同じクラスになれるといいですね」

「そ、そうですね なるるといいですね」

あはははと頭をかきながら おいしそうに食べるケイトから目をそらした先にいたエリーを見ると笑顔で生暖かい視線を頂いた
食堂の中にいる人たちからも視線を感じレオンは気が休まらない朝食を頂いた

「入学式にまた会いましょうね」

「では レオン様失礼します」

レオンはケイトとエリーが楽しげな様子で帰っていったのを見届ると 体の力を抜き椅子に深く腰掛けた

「おつかれさまでした どうぞ温かいお茶です」

「ネイルさん ありがとうございます」

レオンにお茶を渡したネイルはそのままレオンの正面に腰かけた
ずらっぽい表情を浮かべた

「彼女ですか？」

「ん げほげほ」

ネイルの唐突な言葉にレオンはむせた

「あらあら 大丈夫ですか？」

「彼女って そんなわけないじゃないですか！」

「だって 彼女うれしそうでしたよ」

「ちょ、ちよつと縁があっただけです そんな彼女とかじゃないんです ごちそうさまでした」

お茶を急いで飲み終わるとレオンはびゅんと部屋に向かって行ってしまうた

「ケイトくん赤くなってかわいいわね」

ネイルはうふふと楽しそうにレオンを見送った

「ケイトさんもかわいいしいい子なんだけど 目立ちたくないんだよなあ」

部屋に着いたレオンは これからの学園生活 退屈はしないかもしれないと嬉しいような悲しいような気持ちになりそつとため息をはいた

突然の訪問者（後書き）

次は妄想はでてます！！ けれど書く時間がない現実です
なるべく早く書けるようがんばります

まあ こんな駄文待っている人もいないかもしれませんが……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4858y/>

魔術師の弟子

2011年11月17日20時22分発行